

センター長挨拶



地域医療支援センター長 山端 潤也

新型コロナウイルス第7波が長期間、大きな拡がりを見せました。当院でも6月、7月に感染事例がありご心配・ご迷惑をおかけしました。医療従事者の皆さまを含め、厳しいお声も頂戴しました。中には事実と異なる、誹謗中傷に近いものもあり、個人的には怒りや悲しさも覚えましたが、「地域医療は何としても維持せねば」との思いで、できるだけ心静かに、状況の改善に努めてまいりました。

皆さまの中にも感染へ対応された医療機関やご施設が多くおありかと思えます。大変な中でも、紹介や逆紹介、地域連携にご協力いただきお礼申し上げます。

コロナの経験を、医師は学会にて、スタッフは感染研修会（本センターだよりに掲載）にて報告しています。コロナにとどまらず、貴重な経験、事例を地域で共有し、地域医療のブラッシュアップにつなげていくのも当院の重要な役割と考えております。

今後とも多岐にわたりご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

～お知らせ～

認定看護師の同行訪問をはじめました

在宅で褥瘡ケア、ストーマ管理、緩和ケアなどについてお困りの患者さんに対して、その分野に関する専門的知識を持った看護師が適切な看護・介護ケアを提供することを目的に「認定看護師の同行訪問」を開始しました。

当院の認定看護師が訪問看護ステーションの看護師と一緒にご自宅へ伺い、適切な症例に応じたケアの提案やご相談に応じます。

褥瘡に関しては、創傷管理関連の特定行為研修を修了しており、医師の手順書のもと、血流のない壊死組織の除去が行えます。

【対象者の方】

(1) 皮膚・排泄ケアへの依頼の場合

- ・ 真皮を超える褥瘡（床ずれ）があり、在宅療養にお困りの方
- ・ 人口肛門もしくは人工肛門周囲の皮膚にびらん（皮膚がめくれている）、水疱（水ぶくれ）、潰瘍等の皮膚障害が1週間以上継続又は1か月以内に反復して生じている状態で在宅の療養にお困りの方

(2) 緩和ケアへの依頼の場合

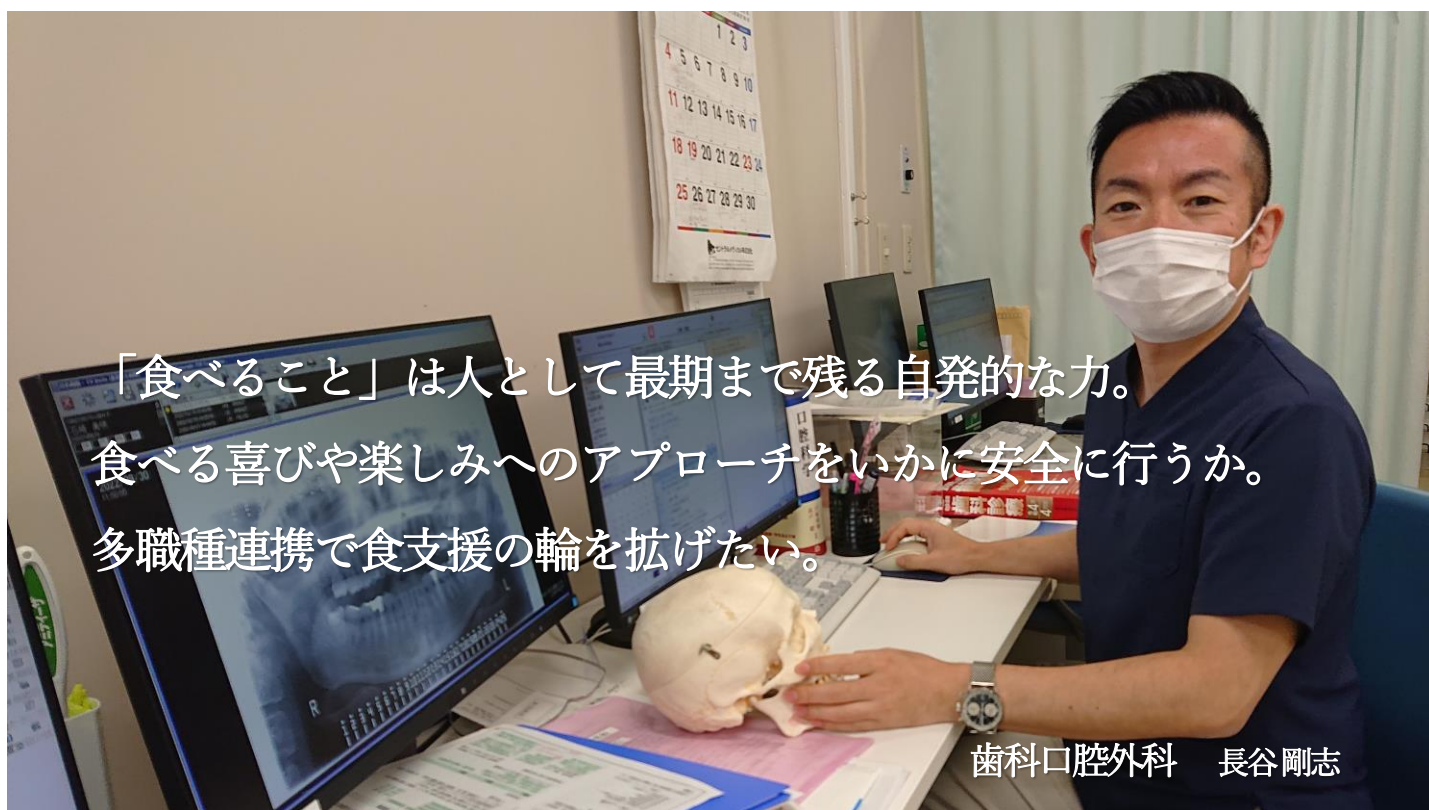
- ・ がんの痛みや化学療法の副作用などで辛い症状のある方

癌の痛みや漠然とした不安があるようだけど、どのように関わっていったらいいの？

ストーマ管理について専門の人に相談したい。

褥瘡がよくなるらない。何に注意したらいいの？

「食支援」を地域で考える



歯科口腔外科 長谷剛志

「食べる」ということ

皆さんは、普段の食事をどのように意識していますか？誤嚥や窒息を避けようと思いつつながら、食事をしている方は少ないと思います。しかし、病気や加齢による廃用が進むと、誤嚥や窒息に注意しながら、いかに安全に食事をするかという視点が大切になってきます。

また、療養される場所によっては、安全な食事のためにご本人の摂食嚥下機能を評価した上で、「食べてはいけない」という判断に至ることも多々あります。そういった中で、私たち医療や福祉にかかわるものの視点として、「食べることの意味・尊厳」を意識し、一人一人の食に向き合う責任があります。



医療・ケアの介入の限界

- よく、・食事介助の手技やリハビリ
- ・食形態の変更、工夫 等

によって、

「食べられるようになりませんか？」という話があります。

摂食嚥下障害の背景には必ず原因があります。

大きく分けると、

- ①病気によるもの、②廃用によるもの、③薬剤によるものが考えられます。

さらに、高齢者の多くは加齢に伴う食欲不振であり、食行動調節系の変調や消化管運動機能の低下、生活機能低下、認知機能障害、食事環境の孤立など多様な因子が影響して生じます。

そのため、前述の対応により「必要な栄養をすべて口から食べられるようになる。」症例は数少ないのが現状です。



「食支援」を地域で考える

安全管理と尊厳

病院や施設には、摂食嚥下機能が低下し、何らかの疾患を発症され入院される方や、疾患により摂食嚥下機能が低下し今後の栄養管理を考えなければならない方が多々おられます。また、病状が安定され自宅療養されている方の中にも食に課題を抱えている方もおられます。

「本人の意欲や嗜好を尊重すると誤嚥や窒息のリスクが高まる。」

「より安全に食事をしていただくことを考えると一般的な食生活との乖離が生まれる。」

そんな狭間の中で、本人の生活史や過ごされる環境、治療の状況、認知機能面の評価等、様々な視点から本人の食を整理し介入するツールとして、

【かにやしるえび】

ノートを作成しました。



か 環境

食費や買い物、生活環境等の本人を取り巻く食環境について把握する。

に 認知機能

認知機能の評価を踏まえて、本人の食事場面を観察し、その人の特性を把握する。

や 薬剤

内服薬の影響で摂食嚥下機能障害等を引き起こす可能性があり内服の整理や服薬状況を把握する。

し 心理

摂食障害以外のうつ病等でも食欲は低下し、食欲不振には、本人の趣味趣向等も関係する。

ろ 老化

本人の活動量や自歯・義歯及び口腔機能の状況を把握する。

え 栄養

サルコペニア等が摂食嚥下機能障害に関係している可能性があり、本人の栄養状態を把握する。

び 病気

原疾患（脳血管疾患、神経変性疾患等）により、嚥下機能の改善見込みやリハビリの方向性が変わる可能性があるため、原疾患を把握する。

当院での取り組み

当院で、3年前に院内の食支援の取り組みや地域に情報を繋ぐことを目的として、「食支援プロジェクト」を開始しました。

現在は、食支援チームとして、食に課題がある患者さんのもとへ多職種で足を運び、

- ・現在の食支援の把握、評価
- ・食の課題解決に向けて取り組みの検討
- ・多職種による情報共有

を行っています。



食支援チームのラウンド

病棟ヘラウンドを行い、対象患者さんの身体・精神及び口腔ケアの状況等を確認します。

上記後、患者さんの食事状況を動画で撮影し、実際の食事場面を見ることで咀嚼、嚥下能力の評価を行い、情報共有しています。

食事場면을直接見ることで、食に関する本人の強みや課題把握が行いやすくなります。



患者さんの食事場面の動画を共有している場面

「食支援」を地域で考える

地域の皆さんと

脳卒中や神経変性疾患等による「摂食嚥下障害」を持ちながら、在宅療養されている方は沢山います。

在宅療養の現場においても、食支援は、重要なケアであるとともに介護する側にとって負担とリスクの大きいケアでもあります。病院や施設での管理生活と異なり、食べることに對する価値観や思いは様々で、家族の理解や協力にも規則性はなく、個々の関わりが重要となってきます。



この課題に対して、
病院退院後に

「咀嚼や嚥下の機能を
再評価してほしい」

「有機的な連携かつ安全な経口摂取をサポートして欲しい」

と地域の先生方から依頼を受けることもあります。

その際、「かにやしろえびノート」を利用してシームレスな食支援を心掛け、それぞれの病状や療養環境に合わせた食の提供につながることであれば願います。



完食

感染対策合同カンファレンスを開催

7月22日と8月25日に感染対策合同カンファレンスを開催しました。

近隣医療機関と当院で計42名が参加し、感染対策の情報共有や、各病院が行っている感染対策について報告を行いました。

抗菌薬の適正使用を進めるため、抗菌薬の使用状況や各医療機関での耐性菌の検出状況などを情報共有し、加えて新型コロナウイルスの感染対策などに関する議論も行いました。

今後も、地域の医療機関や住民の皆さまに安心した医療環境を提供できるよう、感染対策に関する取り組みの推進に努めていきます。



～編集後記～

慌ただしく上半期が過ぎ去ろうとしています。秋に向けて今までできたこと、できていないことを振り返り下半期に向けていきたいと思えます。



当地域医療支援センターで育てているマリーゴールド、バジル、ベビーリーフなどです。バジルなどの香味野菜は収穫しサラダに添えたりしながら楽しんでいます。背丈ばかり伸びているマリーゴールドはいつ咲くのやら。。

脳神経外科輪番日のご案内

10月 1.2.8.10.15.16.23.29.30

11月 5.6.12.19.20.23.27

12月 3.4.11.17.18.25.29.30

小児科休日当番日のご案内

10月 2.10.23

11月 13

12月 4.25